

# 『旬殿実実記』『松浦佐用媛石魂録』『糸桜春蝶奇縁』を読む

——心猿・片目・双子

The fiction of Bakin VII : Syunden, Matsurasayohime and Itozakura

葛 綿 正 一

KUZUWATA Masakazu

本稿では「背」に導かれながら、馬琴の中編読本を読み解いてみたい。すなわち、猿回しが登場しお句と殿兵衛の奇縁を描く『旬殿実実記』（文化五年）、片目の人物を配し秋布と吉次の奇縁を描く『松浦佐用媛石魂録』（文化五年、文政一一年）、双子の姉妹と綱五郎、狭七の奇縁を描く『糸桜春蝶奇縁』（文化九年）である。ここからは、心猿と片目、片目と演劇、双子と分離といった興味深い主題群が浮かび上がってくるだろう。

なお、原文の引用は『馬琴中編読本集成』による。出典考証については同書、徳田武の解説が詳しい。

## 一 心猿と片目——『旬殿実実記』を読む

『旬殿実実記』末尾には「心の猿」と題された一文が付されている。「心の猿は、小天地の間に孕れて、十月に生る、猓猿はしからず…或は善にして悪に馴れ易く、或は悪にして善に帰す、喜怒哀懼、愛悪欲の七情、みな此ものに奮発せられ…」。「心の猿」とは主体がどうすることもできない心の動きを指しているであろう。七情のもとにある根源的な欲動であり、リビドーといってもよい。それがあるゆえに、善人も悪に染まり、悪人も善に改心することになる。制御できないという点で、われわれは「心の猿」に対して盲目であるほかない。

「猿猴は小鼠に伏し、心猿は名利に役せらる。閑に背を曝して、虱を捫んとすれども得せず、嘆息してみづから記

し、みづから注し、もておのが誠とす」。背を曝すことさえ容易ではないという。そんな「背」に注目してみたい。「背」にこそ嘆息が記入されているはずだからである。われわれが盲目であるほかない「背」は何を語っているのか。あろうか。

本作品の登場人物は、いずれも盲点をもっている。たとえば、京都の呉服商井筒屋紀左衛門の義弟に当たる与茂平には後妻の兄の真実が見えていない。「洛中洛外なる、あしき友とのみ交參て、淫酒賭奕におもひを耽らし、夜をもて昼とすればとて、世の人地潜と渾名せしを、与茂平はよくもしらざりけん、桜木が兄なるに……」。この束三のせいで、幕進上の仕事に失敗し、与茂平は都を追放される。

「しばしが程は黙止せしが、束三の言を巧にして、信々しく仕しかば、与茂平ますますこれを愛して、終に桜木が諫を用ひず……いく程もなく束三は、主傍輩の晴を冥して、不義の事どもいと多かり」とあるが、ここには「見ざる、聞かざる、言わざる」を指摘できるだろう。与茂平が商売に失敗することになった幕は、「見ざる、聞かざる、言わざる」の遮蔽幕だったのである。

大和檜垣本に移り住んだ与茂平は妻子の反対を押し切って、滝口早苗進のもとに出仕する。「比しも十二月の下旬にて、目送る妻子もゆく親も、願あはぬ雪風に、招き尽せど枯尾花、煤けし笠も冬の胡蝶の翅に似たる背影、生て帰らぬ首途とは、后にやおもひ合すらん、后にぞ思ひあはしける」。与茂平と桜木の別れの場面だが、「背」は決定的な場面を形作る。以上が巻一、華洛の巻である。

紀左衛門には過ちを犯した息子がいる。意図することなく、乳母の子を殺してしまったのであり、本人にとつてはいわば盲点であった。「背指さされては、家業繁昌すべからず」とあるが、その過ちは本人の知らないところで一生ついてまわるものである。それゆえ紀左衛門は殿兵衛を早苗進の養子とする。「早苗進斜ならず歎び、速に辞来て、面目このうへなし、今宵の契約、違背あるべからずといふに紀左衛門莞爾として……」とある。この後、早苗進は殿兵衛とともに高取に移り住み、城主越智利之に引き立てられる。

養子になったことで、すべてが解決するわけではない。殿兵衛の過ちは、思いもよらない形で反復されるからである。それは早苗進と斧城の娘、与茂平と桜木の娘の類似によって引き起こされる。すなわち、お筈とお旬の類似であ

る。「筥の竹を除き去れば、匂となる、お筥お匂の悪因縁」、この差異をたちまちに見失つてしまふ類似によつて災いもたらされるのである（盲目の類似と呼んでおきたい）。「そと背より眼を塞ば、殿兵衛大に驚きて、誰、無正事すな…」とあるが、一度過ちを犯した殿兵衛は再び盲目になることを恐れている。そうした事態をお筥が引き起こしかねないことを危惧し、「奴隷に宿直囊を背負して、生平よりもはやく出仕」する。

お筥と結婚するため、横淵頑三郎は殿兵衛の追放を企んでいる。城主から宝蔵の鍵を預けられた殿兵衛は、頑三郎が鍵の複製を作ったことに気がつかない。ここにも、盲点がある。その結果、猿の刻まれた宝剣が盗まれ、殿兵衛が疑われる。

宝剣を盗んだのは頑三郎であり、警護中の与茂平を殺していた。そのとき「心の猿」が文字通り、猿の姿になつて現れたといえる。「貫布の袱包を背負たる癖者」の正体は束三だが、頑三郎は宝剣を受け取つた束三とともに、猿の鳴らす音に驚いて逃げていたからである。以上が巻二、鷹取の巻である。

殿兵衛は早苗進に縛り付けられるが（「刀篠をもて、殿兵衛が二腕を背へ楚と括著…」）、このとき盗んだ犯人の背と無実の殿兵衛の背が対比されているといえる。頑三郎は殿兵衛を悪し様に罵るが、かえつて城主から叱責され、「冬なれど背に汗」を流す。

行方不明となつた与茂平が犯人に疑われ、檜垣本にいる桜木は嘆きを深める。娘のお匂は「背門に出て水を浴み、父母の恙なからん事」を祈る。「伏沈む母親より、泣唧るる子どもらは泣じと袖を嚼締て、やをら背を撫おるせば、やうやくに頭を擡げ、阿呀われながら愚地なりし…」。お匂は背を撫でているが、それは母親を慰める唯一の身振りなのである。母親はかつて背負つていたものから慰められる。

「母親を逆さまに、脊負て背門より脱り出」と記されるように、桜木を助けるのは息子の与次郎である。束三はお匂を売り飛ばそうとするが、宝剣とともに驚に掠られてしまふ。「宝剣をお匂に背負し」ていたからである。「お匂が背を無斗と脛み、虚空遙に翔あがれば…」と描かれるが、お匂からは見えない力がその運命を驚掴みにしている。

雪に埋もれ行方不明となつていた与茂平は、雪解けによつて合鍵とともに発見される。両者は見えざる死角に置かれていたわけである。「与茂平が枉死しつるにぞありける。右手の膝より、左手の背へ刺れたる太刀痕あり」。傷を

受けた背は、別れの場面にみえていた「背」に通じるものであろう。決定的な別離を表しているからである（雪による欲情の隠蔽という点で『八犬伝』の夏引の挿話と一致する）。

「歳紀十七八なる壮俊が、その脊を搔撫るに、老女は涙泉のごとく、只いかにせんいかにせんとて泣しかば……」という姿を見せるのは、桜木と与次郎である。「壮俊は母を脊負て」檜垣本に戻る。以上が巻三、檜垣本の巻である。

宝剣を求めて早苗進は山に入っていくが、そこには雌猿がいるらしい。「その群皆雌にして、匹偶ことなきによりて、男子に遇毎に、かならず負去て合んことを求む」という噂を耳にする。「件の山媪に負れたらば、いかにせん」とあるが、女たちの群れに連れ去られることを恐れている。かつて背負われていたものに連れ去られるのではないかというのが男の不安なのである。

山中で早苗進は、お旬を助けてくれた猿とは知らずに射殺してしまう。ここにも、盲点がある。「その箭猴の胸さかを、背へ籠ふかく移徹したり」とあるように、牡猿の亡骸は与茂平の亡骸と重なり合っている。「牝猴は有身侍るから、はや産月とおぼしきに、傷つけられたる夫を負て、慌忙き逃走りし」という場面は痛ましい。

与次郎と桜木は、牡猿のそばで自害している牝猿を見つけ、体内から子猿を取り出す。与次郎は思わず小指を傷つけてしまうが、そのとき短刀に二匹の猿が浮かび上がる。つまり、思いもかけない心の動きで現れたのが猿なのである。与次郎は行李の上に子猿を背負うようになる。

同時に桜木は目を病むが、それは猿殺しの挿話と無縁ではない。後で述べるように、眼病回復には猿の死が関連しており、猿の死と眼病には関連があるといつてよい。見えないとき、過ちを犯すのであり、また過ちを犯すことで、何かが見えなくなるのである（ここで「過ち」について定義を試みるとすれば、過ぎてしまったことが過ちであり、過ちとは過ぎてしまうことにほかならない）。以上が巻四、山手谷の巻である。

斧城がお旬とお旬の寢室を交換したために、悲劇が起こる。殿兵衛がお旬を斬り殺し（「背を一太刀殿と砍られて」）、斧城も自害する。早苗進は一挙に妻と子を失うことになったが、これは猿を殺した報いである。早苗進はお旬の代わりにお旬を娘とし殿兵衛と結婚させる。そして宝剣探索の旅費を手渡しするのだが、その暗闇の場面が興味深い。地下に潜んでいた頑三郎は暗闇を利用して、早苗進から五十両を受け取り、殿兵衛に小石を渡す。誰にも知られること

なく、お筈を手に入れた頑三郎にふさわしい挿話である。以上が巻五、婚姻の巻である。

お旬、殿兵衛は京都加茂川の南堤に移り住み、猿回しをしている与次郎と出会う（堤は、猿回しの鼓と響き合う）。しかし、お互いの関係には気づかない。蝟に功德をほどこした与次郎は老僧から眼病治療の方法を授けられるが、それはまさに「猿を背負て立帰らん」とするときであつて、「心の猿」との関連が見て取れる。

お旬の居場所気づくのは、叔父に当たる東三のほうである。お旬は、「背へ手を合し」改心したふりをする東三に騙され、宝剣のために身を売ることを決意し、わざと殿兵衛に愛想尽かしする。「やをらその背をかひ撫」る東三は執拗であり、お旬の盲点を知っているかのようだ。以上が巻六、縁きりの巻である。

殿兵衛は見ず知らずの男に蝟を盗んだと因縁をつけられるが、ここでも、自らの関知しないことに巻き込まれているといえる。「罵もあへず、撃倒さんとしたりしかば、殿兵衛はや身を反り、水平が手首捉て背へ振揚…」。そして、殿兵衛の知らないところで、悪党の水平は捕まるのである。

お旬を手に入れようとして口論になり、五条河原で頑三郎は東三を殺す。そこに殿兵衛が追つてきて、頑三郎を殺す。「横淵ははや力衰へ、背の肋乳の下まで、数箇処の深痕に、心ますます遽つつ、打太刀も乱しかば、殿兵衛は身を閃して…」。活劇が終わつた後、水飛沫でお旬が目覚ます場面はすばらしい。お旬が何も知らず、無知のまま留め置かれていたからである。「貌見あはして、兄君ならずや、妹よ、恙なかりけり、と名告もあへず手を掖て、猴も背中に主従同胞、鬨諍の相手を殿兵衛とは、後にぞしるやしら浪に、洗ふ沙を踏かへし、堀河投て走去ぬ」。兄と妹が見合わすとき、もう一人の男は排除されてしまう。戦つた相手が殿兵衛とも知らずに、与次郎はお旬を連れて逃げるのだが、ここにも盲点がある。以上が巻七、河原の巻であり、以下は堀河の巻となる。

桜木は与次郎とともに京都堀河の借家に住んでいる。「病て久しく見えぬ眼に、三年を夜の桜木は、なほつれづれと待ぞわぶ。生平にもあらで与二郎が、なごて遅き、といとどしく、子ゆえの闇をさぞかして…」とあるが、まさに子供への愛ゆえに桜木は盲目なのである。

与次郎は困窮している。「背影を見て声をふり立、逃な逃な」と追いかけられ、「負たる猴をかきおろせば」借金取りが入ってくる（巻八）。殿兵衛を捕まえれば褒賞がもらえると唆され、「土俵の背より」聞いていたお旬は驚く。

「お旬は背をふし拜み、いよいよ身をぞ潜めける」。

桜木は「ふたたびお旬の背をかひ撫」ている。与次郎はわざと殿兵衛を悪し様に語るが、それは殿兵衛を匿っているのではないかという世間の疑いを欺くためであった。しかし、お旬にはその真意がわからない。「お旬は傍に聞も悲しく、涙声せじと、瘡の、脊向て与二郎は小膝を拍て感嘆し」。背を向ける、そのとき何かを隠しているのであり、同時に何かが見えなくなるのである。

殿兵衛は与次郎の家に逃げ込み、捕り手が家を取り囲む。「外面には追捕の兵士、今殿兵衛がこの家へ、入るを指し密語て、半は背門へ、と引わかれ」とあるが、殿兵衛の見えない部分に踏み込むのである。それはかつて犯した過ちにほかならない。

殿兵衛は再会したお旬を慰める。「祈りし神の償きてや、恙なき容止を、見せ給はするぞ喜しきに、と携り付つよよと泣、理なり、と殿兵衛は、その背をかひ捺り：」（巻九）。「神の導き」とあるが、むしろ「背」の導きに見える。桜木の眼病が治るのは、自害した子猿の生き肝によつてである。その子猿が宝剣の「背」に浮かび上がる。「今この鞘を見るに、背なる牝猿の傍に、又一頭の雛猿を副て、すべて猿は三頭となりぬ」（巻一〇）。こうして三匹の猿が揃うことで、「心の猿」は安定するのである。

三匹の猿、それは巻六冒頭に描かれた「見ざる、聞かざる、言わざる」であろう。人間は「見ざる、聞かざる、言わざる」を運命づけられており、それゆえ「心の猿」が動き始めるのである。そうした「心の猿」を主人公としたのが本作品ということになる。

殿兵衛は、与次郎の妹お旬と夫婦になつて武家の滝口家を継承し、与次郎は殿兵衛の妹小縫と夫婦になつて商家の井筒屋を継承する。ここには無意識の交換を指摘できるだろうが、それが「心の猿」の動きにほかならない。「心の猿」が家族関係を操作していたのである。

## 二 片目と演劇——『松浦佐用媛石魂録』を読む

次に、春振山地の伝説を題材とした『松浦佐用媛石魂録』前集、後集を取り上げてみたい（一）。盲目に近い片目の存在が登場してくるからである。鏡神社に子宝を祈願した瀬川夫婦は、「薪を負たる賤女」を側室とするよう告げられる。それが玉嶋であり、松太郎、浦二郎の双子が授かる（二）。鎌倉に出て北条時宗に仕えた松太郎は、吉次と名乗る。望夫石近くで誕生し佐用媛の生まれ変わりとされた秋布は才学があり、時宗の母、南殿に仕えている（三）。秋布に求婚して断られ逆恨みするのは、片目片足なえの鼠川嘉二郎である（四）。秋布の才学を妬んだ嘉二郎は長城野平太とともに、「門字の謎」など論争を挑むが、「頻に焦燥で、潜にその背を敲て催促する」ありさまである（五）。その妨害をはね除けて、吉次と秋布は結婚する。しかし、吉次は九州に派遣されることになる（六）。牛渕清繩を軍師として太宰府の平経高が謀反を起こしたためである。秋布は別れを悲しみ（七）、関蓑七に手紙を託す（関は石と音が通じるが、門字の謎にかかわるかのようだ）。

手紙を預かった蓑七は、嘉二郎の差し金で勘八に襲われる。「まづその行裏を奪ひとりてこれを脊負ひ、しづかに刀を引抜て、蓑七が吭のあたりを、板子も徹れとぐざと刺ば……」（七）。喉に深い傷を受け、荷物は海に落ちてしまう。この荷物は流れ着いて時宗のもとに届いており（八）、本作品においては背負うことよりも流れ着くことが重要、たといえる（実際、この後、吉次も浦二郎も海に流されて行方不明となる）。

清繩は名刺を捨てれば長寿を全うできると予言されていたのだが、心ならずも経高に加担することになり、もはや「違背」することはできない（九）。吉次が清繩を追って辿り着いたのは、玉嶋の家である。玉嶋は清繩の姉であった。実の母、玉嶋、双子の弟、浦二郎と再会した吉次は清繩を討ち取るが、ここには双子にふさわしい水鏡の場面が用意されている。しかし、その水鏡が不吉な装置であったかのように、玉嶋も清繩も自害してしまう（一〇）。ここまですが前集である。

清繩の遺言は「八の弓人」すなわち「弟」が兄の身代わりになるというものであった（一一）。弟の浦二郎は許嫁の糸萩に別れを告げるため出立する。兄の吉次は鼠川たちに襲われ、太股を射られて海で行方不明となる。「加二郎兵太は征箭を背負て……」とあり、「兵太が頻りに射蒐る征箭に、背を射れて俯すもあり」という激戦である（一二）。

秋布の父、博多弥四郎は、その願文が不忠であるとして咎められ、刺殺されるが、鼠川加二郎たちが「雖不」の文



言を付け加えて陥れたことが判明する。時宗の命を受けた秋布は、俊平とともに父の仇討ちのため京都に旅立つ（二二二）。清水寺で「藁包を背に負ふ」少年に出会った後、秋布と俊平は寺に宿をとり、「背門の空房」に案内される。しかし、悪僧たちに縛り付けられてしまう。「腕を背へ振揚振揚、思ひの俣に縛めて、引立来つつ、俊平と間一室を隔たる、柱に楚と繋ぎけり」（二四）。悪僧たちが俊平の背負ってきた荷物を調べており、腕をねじ上げられた俊平の背中には何も無い。意外にも、清水寺で出会った少年に助けられるが（二五）、その藁包を背負った姿は二人への警告であつたといえる。

二人は浪速の天満に宿を定めた後、難波村に移り住む。二人の世話をすることになった老婆の輪栗は俊平の欲情を焚きつける。「播磨と備前の封疆なる大山嶺の麓に来にけり。比は十二月の下流、樹杪の木葉落尽して、松柏の操を顯し、山川の流水半涸て、石背も渡に堪たり」（一六）。無名の少年は俊平に対して愛欲の念を諫めていたが、「松柏の操」はその厳しさを示すものかもしれない。しかし、「石背も渡に堪たり」とある通り、微かな回路が通じかねないのである。ここで秋布は病気が重くなる。俊平は秋布に思いを寄せはじめが、その足を自らの太股で暖めて自滅に至る悪夢を見て、思いを断念する（加二郎が吉次の太股を射たのは、エロチックな嫉妬のせいだったのかもしれない）。「肌と膚、合せ鏡の二回、口より口へ移したる、水は妹背の盃」、そんな夢が覚めると、「腋下より背より、冷やかなる汗の流れて、寝衣の裏を浸したり」というありさまである。輪栗は息子の棒太とともに、秋布を連れ出し売り飛ばそうとする。それを聞いていたのは、家主の店九郎である（家主店九郎は背門にをり、縁由を洩聞て、咳きしつつ借家に来つ……）。

俊平が追いかけると、棒太の相棒が「俊平が背後より頭を臨で撃つ息杖の閃く程に身を沈まして、左へ避ければ勢ひ余りて、棒太が肩を礮と打つ」（一七）。まさに同士撃ちである。そこに関蓑七が現れ、輪栗を斬る。「身を天さまに筋斗りて、首は背後に撲地と飛び、身は前に仆れけり」。輪栗の首は円を描き、あたかも自らの背中を見ようとするかのようにだ。蓑七は自ら背負っていた荷物を失ったが、代わりに犯行の証拠となる勘八の荷物をもって舞い戻つて来たのである。

秋布主従は、海から流れ着いたという異様な風体の乞食と遭遇する。足なえの乞食は次に登場する語黙齋を予告し



ているだろう。「序に背門を鎖すべし、こなたへ来ませ、と先に立て、奥庭望てゆく母の後に従ふ糸萩も、盃引提ていそげに、背門のかたにぞ赴きける。この日も既に暮れ初て、人貌わかぬ王奔時に、仇人の所在を索当て、外面に立つ」(二八)。語黙齋こと根塚若二郎が片目片足なえであつたため、秋布は鼠川加二郎と間違えて斬りかかる(一九)。両者は名前まで似ている。語黙齋の妻が手枕、その娘が糸萩である。前編にもあつたが、「盃」の場面は人違いを招き不吉にみえる。手枕に脇腹を斬られた俊平が、実は手枕の異母弟であつたことが判明する(二〇)。

そこに虚無僧姿の吉次と蓑七が現れる。もちろん、蓑七は荷物を背負つてゐる。「関蓑七は、若二郎夫婦と商量して、俊平が亡骸を桶に斂めなどしつ、その晝かたに擡出して、背門より一町ばかりなる、田の畔の墓所に埋めて、雛松を栽て表とす」(二二)。亡くなつた俊平は手厚く葬られるが、背負つていくのは蓑七の役割であろう(もとの名を「木瀬屋鑿吉」といい、実は「瀬」を背負つていたことが明らかになる)。

「背向になりてもものいはず」緊張感を高めてゐるのは糸萩である。糸萩は吉次が浦二郎その人ではないかと疑い、秋布と親しくするので激しく嫉妬する。「準備の短刀抜かけて、潜近づく巻石伝ひ、六七歩ゆく程に、能化寺よりかへり来て、背後に窺ふ父若二郎、糸萩等、と呼制れば、吐嗟、とばかりうち驚きて…」。飛び石伝いというところが官能的にもみえるのだが、嫉妬に凝り固まつたとき盲点が生じる。そこを父親に突かれるのである。「準備の早縄とり出しつ、糸萩が双の手を、背へ振揚振著て、はや袴々と縛て、背門の此方の老松の、幹に楚と繫留めて、嘆息しつ…」。この「双の手」は双子に伸びている。

吉次夫婦は糸萩の怒りを煽り立てるかのようになり、目の前を出立する。「糸萩が縛られたる、ほとりを過らでゆく路なければ、笠を翳し面を背けて、走りて母屋を遶りつ、辛くして…」。このとき「跳揚跳揚、狂へば狂ふ心猿意馬」の姿を見せた糸萩は嫉妬の力で鎌を動かして追いかけるが、嫉妬の鎌で死ぬことになる。

平経高の前に、「腫張たる全身は、蝦蟇の背に異ならず」と評される異様な風体の乞食が引き出され、捕まつた語黙齋夫婦、吉次夫婦、蓑七も引き出される(二二)。経高は「わが命に背かば先吉次を殺して勢ひを示すべし」と鞭打ちを命じるが、それは吉次の背が「蝦蟇の背」になることを強要しているといつてよい。この後が、いわゆる琴責めの場面である。

異様な風体の乞食は潮毒のせいで腫れあがつていた浦二郎であつたが、糸萩の血で回復する。「背に立たる浦二郎を、斬んと見かへる敵の透間を、秋布得たり、と薙刀を振閃して丁と砍る」(二三)。吉次、浦二郎の瀬川兄弟が龍神の化身であつた姥口歌二郎の手助けで、平経高を討ち取るというのが結末である。

片目の人物が二人も登場してくるが、本作品における盲目とは何だろうか。それは博識がもたらす盲目だと思われる。確かに、秋布は博識である、しかし博識ゆえに見えないものがあつたのではないか。秋布は自らの「生才学」「博士態」を後悔していたのである。馬琴もまた博識である。しかし、自らが過ちを犯したことを苦々しく記している(『燕石雑志』「恠刀禰」の条など)。片目の人物とは加二郎と語黙齋のことだが、一方は悪をなすがゆえに盲目であり、他方は知識があるがゆえに盲目である。

博多弥四郎の娘、秋布は佐用媛の生まれ変わりとされていたが、それは知識によつて思い込まされていたにすぎないといえる。それに対して、欲深い乳母、輪栗は自分の娘だと語つていた。しかし、これは信用できる話であろうか。金がほしいので出任せを口にしただけでもいえる。高貴な出自なのか卑賤の出自なのか、どちらともわからない。学問のある男の言葉、欲深い女の言葉、いずれにも盲点が存するからである(ここで、損すると存するが同じ言葉として発音されることに注意してみたい)。

本作品には吉次、浦二郎という双子が登場する。加二郎と語黙齋も、片目の共通点があり双子に近い。一方は実の双子であり、他方は片目を瞑つたとき見えてくる虚の双子である。こうした視点に立つてみたとき、本作品の末尾にある実場と虚場の区別は新たに捉え直すことができるのではないだろうか。

本作品の末尾で、馬琴は「大約小説に実場あり虚場あり。虚場は所云、乾坤丸船船中の緯の趣、又村山俊平が夢寝の一段、即これ也。実はよく情態を写すをいふ、虚は猶仮の如し、虚実の二場を弁するものを、よく小説を観るといはまし」と述べる。「乾坤丸船船中の緯の趣」とは歌二郎が出現させる歌舞音曲のことである。しかし実場も虚場も、言葉という同じ素材から成り立っている点に注目してみなければならぬ。虚場を象徴する物は、たとえば歌二郎の吹く笛である。「二孔は背に出て、今の尺八に似たり」とあつたが(後編卷二)、そこには「背」の一語が見て取れる。見えない穴を手探りで見つけ出す、それは確かな実の動きであろう。ここに一つの逆説が生まれる。

「吉次呵責の段なる、音曲合奏の趣は頗雑劇脚色に似たり」と記すように、馬琴は虚場が演劇に似ることを認めている。その意味では虚場のほうが芝居という現実に近い。逆に、馬琴が実場とするところこそ創作であり虚構なのである。双子を分離させて活躍させたように、実場と虚場を分離することで、馬琴は新しい創作方法を作り出したというべきであろう。加二郎が実場の存在だとすれば、同名に聞こえる歌二郎は虚場の存在にほかならない。見えない「背」を押さえたり離したりすることで、馬琴は音楽さえ奏でるのである。

巻末には実在の歌舞伎役者への言及があり、本作品は俳優に捧げられているようにみえる。瀬川兄弟は異様な「背」の皮をもつことになったが、ここから演劇への示唆を見て取ることができるだろう。それは異形の仮装としての演劇という考え方である。役者とは現実を半分無視した片目の存在といえなくもない。現実を半分無視したところで成り立つ演劇とは、片目の芸術であろう。さらにいえば芸術とは本来、片目の存在であり、片側で見えない何かを見ているのである。一つ目という欠如は過剰を生み出すのではないか。そんなことを考えさせるところに本作品の意義がある〔2〕。

### 三 双子と分離——『糸桜春蝶奇縁』を読む

次に、『糸桜春蝶奇縁』を取り上げてみたい。本作品にも片目の要素がしばしば登場するからである。すなわち、二つ組のものが片割れになる事態である。冒頭の挿話をみてみよう。東六郎は合戦で功績をたてるが、しかし褒賞に与らない。本来二つ組であるべき功績と褒賞は分離している。他人の陣羽織を着用して戦ったため、その功績が見えなくなってしまうたのである。その意味で、一文字の陣羽織は分離の目印といえる。

鎌倉から出奔した東六郎は、賀茂川で無理心中を迫る男を見て、女だけを助ける。「牡は左に、牝は右に」とあるが、川に流されて男の姿は見えなくなるのであって、残されたのは二つ組の片割れである。「おん身が彼に背くにはあらず」と論じ、東六郎は越後蒲原出身の遊女、曙明と夫婦になり、双子をもうける（第一段）。亡くなった男の命日でもあるのだが、「袴を着せ、衣の背紐を積する」という子供の誕生祝いの日、東六郎は曙明が男と密会している

のではないかと疑う。「背より走り出、奸賊等、と呼びかけ」る、しかし男は消えてしまう。この一八の怨霊のせい  
で、夫婦は別れるのである（第二段）。

曙明は次女の止以子を連れて家を出る（「左に止以子右に笠」）。荷物を背負った若者と老女の二人連れと知り合い、  
天竜河で母子は別々の舟に乗る。老女が娘を背負ってしまったためである。曙明の乗った右の舟は助かるが、止以子  
の乗った左の舟は行方不明となる。残されたのは二つ組の片割れである。癖者が「背より抱留」るが、曙明は兄の十  
兵衛に助けられる。武蔵豊島にある糸屋に行き、名を旦那と改め、その主人、十十作と再婚する。十十作は一八の弟  
であり、一八の妻、阿或、その子、綱五郎もいる（第三段）。

東六郎は長女の小草を連れて鎌倉に帰ろうとする。船中、遠州灘で海神の生け贄になるとき、「小草が背へ楚と負」  
したのは大切な陣羽織である。無情にも船客たちは「背より携りて」二人を引き離す。東六郎は海に沈むが、小草だ  
け助かる。東六郎の姿は見えなくなるのであって、残されたのは二つ組の片割れである（第四段）。

心中する二人が別々になったところから始めて、それ以後はすべて一八の祟りのせいなのだが、双子が別々にな  
ること、二艘の舟が別々になること、同じ海に沈んだ二人が別々になることなど片目の事態といふべきものを指摘で  
きるだろう。

行方不明の十以子は、老女に掠われ、小糸と名づけられていた。「女の童を脊に負ひ」逃げたのは残忍毒悪の老女  
である。鎌倉の神原矢所平は息子の狭五郎を小草と結婚させるはずであったが、東六郎が到着しないので責任をとつ  
て自害する。「主君の仰に背かば、天高共、地は厚共、身を容るるに所なし」と誓う狭五郎に、主君の山内憲政は  
「辻町の尽処にて、儔罕なる美女を見たり。彼は背棋といふ婦婦が女兒に、小糸と呼ぶるものなりき」と語り、小糸  
を連れて来るように命じる（第五段）。小糸を掠った女の名前には「背」が刻み込まれているのである。扇谷家との  
婚礼を控えた主家のため、狭五郎は小糸を差し出さないように懇願するが、欲に目がくらんだ背棋は「背向になり」  
承知しない。矢で狭五郎の「背胸前嫌ひなく、つづけさま」打つに至る。そんな背棋に斬りつけた狭五郎は小糸と  
もに逃げ、夫婦になろうと考える（第六段）。

海で行方不明になった小草は、尼に助けられ、大総と名を改めていた。木嬰尼は一八の妻であり、鎌倉に連れて行

くことを約束する。「大総が長き黒髪を、半剪て垂髪女僧に打扮せ、笈を脊負ひ、錫を衝鳴らし、草庵を住捨て、三月廿一日の朝まだきに啓行して……」。尼が亡くなると、大総は一人で出発する。「一文字の陣羽織を包たる、行袱を脊に負ひ、白骨の壺を項に掛、心ほそくも只ひとり、武蔵のかみ田を心あてに、東を望てゆく……」。

背中の荷物に入っていたのは陣羽織だが、それを奪われてしまう。「見れば行李もおもげなり、袱包を脊にして、胸にも物を掛たれば可惜女子の値がおちる、竹輿に乗ずば負れ給へ、まづその行李を、と遽しく竹輿かきおろすその隙に、逃んとするを遣りも過ぎず、かひ瓢で引よする……」(第七段)。この弾みに大事な陣羽織は投げ上げられて、背の甥に当たる黒平の手に落ちる。かつて荷物を背負っていた若者だが、そこに転がり込むのは「背」の必然ともいえる。大総は十兵衛と知り合い、糸屋に連れて行ってもらう。

大総が自分の娘であることに気づかないまま迎え入れた旦那は、綱五郎と夫婦にすることを考える。家業を嫌う綱五郎は翻蝶丸を名乗る任侠だが、黒平を踏みつけようとして、その片足がしびれたことから、陣羽織の在処がわかる。これは一文字の片面効果なのであろう。陣羽織がなければ、平然と黒平の「背を楚と蹂躪」、俵を「背の上へよせかけ」ることができるからである(第八段)。

逃げてきた狭五郎は綱五郎に助けられ、弟分として狭七を名乗る。黒平は山賊と手を組み、綱五郎を生け捕りにしようとする。「背へ左右の手をまとはし、頭を低て」というのが和陸を装った山賊の姿である(第九段)。山賊は「綱五郎が背に跟」従っている。綱五郎は山賊に捕まっていた小糸を救い出すが、扇谷家に敵対する形になる。「背手に縛られて、地の上五六尺」の小糸を見て、綱五郎は「嘆息」している。「背」から「嘆息」へ、これが馬琴の筆法にほかならない。十兵衛は小糸を「背門へも出さず」匿う(第一〇段)。

綱五郎は家業に迷惑をかけず陣羽織を探すため、狭七と大総を結婚させようとする。「ともかくも宜ふよしを、背き侍らじ、と応しかば、綱五郎はふかく歎び、善はいそげといふ事あり……」。これは綱五郎が大総を説き伏せるところである。しかし、大総は納得がいかない。「旦那がはやす生盛臆の、背腰の鱒は鮮く、生るがごとく見ゆれども、死を決たる新婦は、精進かための花松魚……」。婚礼の準備が進むが、そこには不吉なものが忍び寄る。「浮ぬ狭七は迷惑と、座席の芥かき払ひ、物おもふ身は暮かかる、空を仰て背門へ出……内より走り出る女子を、見かへれば小糸なり」。

狭七は隠れていた小糸に気づき、驚く。「旅寝に結びし妹伏の奇縁、楊貴妃小町も何かはせん、怒らるるはこころに  
ず、しばしが程ぞ、忍び給へ、と背を拵ていひ諭せば……」と慰めているが、二つ組はなかなか揃わないのである（第  
一段）。

狭七と大総の婚礼が執り行われる。「誠心に背くことなく、夫婦力を戮しつ、昵しうし給はば、活業是より繁昌  
せん」と且開は説教し、背戸屋十兵衛も語る。「絆の本末をしらぬ阿総は沈吟じ、背戸の小父公がこの盃に、類れと  
宣ひしを、心にかけて謎々敷、釈ども釈ぬ化むすび……」と大総は納得できない。且開は、困惑する小糸の「背をかい  
捺」っている。大総が自害しようとするので、狭七はその小柄を取り上げて「背門より」逃れ出る。「屏風の背」に  
いた小糸は嫉妬の炎を燃やし、狭七の後を追いかける。「背に刀を抜」く山賊に襲われた綱五郎は「背のかたに人あ  
り」と十兵衛に気づき、山賊を追ひ散らす（第二段）。

狭七と小糸は小石川に隠れ住む（第一三段）。狭七が大総の小柄を返すよう小糸に頼むが、小糸は渡さない。「小柄  
を吾儕に領給へといひつつ懸て出す手を、かき払ひて背後へ隠し、阿総に念残さぬ、と宣ふが実事ならばなどて又彼  
人の、手にふれたりし小柄をば、いと惜み給ふぞや……」（第一四段）。小糸は大総に嫉妬しており、それを背後に隠し  
ているのである。それゆえ、狭七は背中を撫でて、小糸を慰める（「果敢なきものは女子也、といひかけて伏沈む、  
背をやをらかい拵て……」。だが、「背向になりて伏沈む」小糸に向かつて、十兵衛は「恩義に背く狭七が逐電、其をそ  
そのかさせし和女郎が淫奔」と罵る）。

大総はすべてを失った悲しみで失明するが、葉の入っていた印籠から、且開と大総、小糸の母子関係が明らかにな  
る（この葉は家族を結びつけるものであり、滝沢家製造と同じ役割を果たすのであろう）。これまで見失っていた家  
族を改めて見出す。だが、まさに、そのとき母親の命が奪われるのである。黒平は狭七を刺そうとして、且開を刺し  
殺す。「いたく病眼に閉られて、今般の母を見ることかなはず……」という大総と「目をひらき、うち見たるのみ応は  
得せず」とある且開の対比に注目しておきたい（第一五段）。語るものと見る者の対比である。

綱五郎が現れると追っ手を取り囲むが、背後から次々に矢が飛んでくる。「捕手の兵士三四人、脱さじと聞きた  
る、背後に響く、鎗矢に、一個の兵士背より、胸前へ射徹され、その矢あまりて又一人、おなじまくらに倒れしか

ば……」。これら背後からの矢は、知られざる過去から飛んでくるものであろう。一挙に過去が開示されるからである。大総の眼病は一字陣羽織のおかげで治るが、それは再び二つ組が戻ってきたということにほかならない。且開が死に、一八の祟りは消え失せることになる。

綱五郎、大総の夫婦は武家を継承し、狭七、小糸の夫婦は糸屋を継承する。『松浦佐用媛石魂録』には実と虚の二重性がみられたが、本作品『糸桜春蝶奇縁』には武家と商家の二重性を指摘できるだろう。『旬殿実実記』と同様である。

曙明が一八と東六郎の願いをともに叶えることはできない。しかし、双子をもうけることで両者の家の願いをともに叶えることになったのである。さらに神原の家の願いを叶えることにもなったといえる（結ばれたのは蒲原出身の遊女の娘と神原氏の息子である）。小柄には三つの蝶が付いていたが、三つのものをどのようにして二つに組むかが本作品の主題なのかもしれない。翻蝶丸を名乗る綱五郎は、その翼のごとき二つ組を求めていたのであろう。それは和綴本という双蝶でもある。

## おわりに——盲目の存在論

人は盲目であるほかない、これはギリシヤ悲劇『オイディプス王』に遡る存在認識だが、馬琴にも、そうした存在認識を見て取ることができる。馬琴のいう因果は、背向にしか見えないものだからである。もちろん、粗雑な本稿は様々な盲点に満ちていであろうが、以上の論述を通じていくらか明らかになったはずである。馬琴を読むとは、自らの盲点に気づくことであり、そこから再び何かを見出すことなのである。近松に「我が身の上は見ゆれども、人の上には盲目同然」という言葉があるが（『傾城酒吞童子』五）、馬琴もそれを共有している。読本の執筆は盲目を代償としており、当たるか当たらないかは作者自身にもわからない。

『八大伝』に登場していた怨霊は自らの盲点に気づかない存在であり、俳優は自ら盲点を仮装する存在であったといえる。さらに、共同体とは盲点を共有し合うものであり、王権とは盲点の共有を強制するものであるという定義も



可能であろう。

『頼豪阿闍梨恠鼠伝』末尾に馬琴は次のように記している。「世に伝ふ悪七兵衛景清、頼朝卿を狙撃んとするに事ならず。頼朝卿、その精忠を憐み、これに狩衣を給はりて、晋の予讓が故事に擬す。景清空衣を刺、目玉をくり出し、日向国に退て住ぬ。世にここを日向勾当と号するよしいへり。しかれどもその事何の書にも見えず。按ずるに東鑑に、建久三年正月廿一日、平家の侍、上総五郎兵衛忠光、魚の鱗を眼上に覆、左の眼、盲るごとくにして、前幕府、頼朝を狙ひ打んとす。事あらはれて、これを六連の海辺に梟首す、といふ事見へたり。景清が事はこれに因て作り設たる根なし言なり」。

盲人の存在は見えず、盲目を装っていた人物は見える。これによれば、盲目は決定不可能な事態といえる。盲人がいたかどうか判然としないし、実際に盲目であったかどうかも判然としない。むしろ、盲目とは虚構だといふべきかもしれない。何かを狙い見るための仮装の役割を果たしているからである。盲目は本質というよりも、むしろパフォーマンスであり、明察に至る方法なのである。自分の背中を見ることができないという点では、誰もが半分は盲目である。しかし虚構によって、その盲点を明らかにできるだろう。

江戸の社会において馬琴の原稿は交換の対象であり、馬琴はしかるべき原稿料を受け取っていた。しかし現在、その作品は交換された以上の価値を与えてくれる。様々な喜びを与えてくれる馬琴の読本は、馬琴からわれわれへの首目の贈与なのである。

## 注

〔1〕 本作品の先行研究としては高木元「『松浦佐用媛石魂録』論」（『江戸読本の研究』ベリかん社、一九九五年）があり、構想、典拠、前後編の相違を論じている。また湯浅佳子「『松浦佐用媛石魂録』における忠義と情愛」（『読本研究新集』四、翰林書房、二〇〇三年）がある。

〔2〕 片目片足の先蹤は近松作品にみられる。「足はちんばで遠道ならず、片目はかんだで見える事不自由、背小そふて柵な物下ろすも、間に足らぬ山本勘介」である（信州川中島合戦）。もちろん、上田秋成『春雨物語』には短篇「目ひとつの神」が存する。柳田國男は「一目を「生け贄」の痕跡とみなしたが（「一目小僧その他」）、片目を失うことで何かを得ているともいえる。

〈キーワード〉 心猿と盲目、片目と演劇、双子と分離、馬琴

〈要旨〉 本稿では「背」に導かれながら、馬琴の中編読本『旬殿実実記』（文化五年）、『松浦佐用媛石魂録』（文化五年、文政一一年）、『糸桜春蝶奇縁』（文化九年）を読み解いた。そこから明らかになったのは、心猿と盲目、片目と演劇、双子と分離という興味深い主題群である。